

## ヴェルサイユ宮殿美術館と現代美術

——歴史的な展示空間と作品の摩擦がもたらした批評と破壊行為——

新井晃

### はじめに

2000年以降、現代美術の展示空間として世界遺産や文化財登録のある城や宮殿、また寺社仏閣といった歴史的建造物を活用した事例が、フランスや日本を中心に増加の一途を辿っている。例えば、フランスではフォンテーヌブロー城や城塞都市カルカソンヌが用いられ、日本においても国際博物館会議の一環で二条城や清水寺を会場とした現代美術の展覧会が試みられている。

そもそも、現代美術の展示空間は、ホワイト・キューブが従来のもものとされてきた。これは1929年、ニューヨーク近代美術館が純白の四壁からなるホワイト・キューブを導入したことに端を発する。ホワイト・キューブ論の嚆矢として名高いブライアン・オドハティ（Brian O'Doherty, 1928-）によると、白い壁の展示空間は「消火栓が美的な難問になるように灰皿スタンドすら神聖な物体になる」<sup>(1)</sup> 効果を持つ。つまり、ホワイト・キューブには作品を強調させる効能があり、多様な素材と支持体により様々な色彩と形態をもつ現代美術に適している。以来、世界各国の美術館や画廊においてこの形態が普及してきた。

しかしながら、前述のように歴史的建造物を活かした現代美術の展示が21世紀より興隆をみせている。美術批評家のハル・フォスター（Hal Foster, 1955-）は、フランス西部の教会前に展示されたリチャード・セラ（Richard Serra, 1938-）の作品《聖エロワのための八角柱》（1991）について、「背後にあるロマネスクの教会と共感しあう関係にある」<sup>(2)</sup> と指摘する。しかしフォスターは、作品と展示空間の関係を簡素に述べるにとどまり、ホワイト・キューブとの相違点や歴史的建造物の特性について論じてはいない。

本稿では、10年以上の取り組み実績をもつフランスのヴェルサイユ宮殿美術館の

事例から、歴史的建造物で現代美術を展示すると何がもたらされるのかを探りたい。これに関する先行研究には、イレーネ・シュッツェ (Irene Schütze, 1968-) とティエリー・ルフェーヴル (Thierry Lefebvre, 1955-) が挙げられる。前者は論争を巻き起こした三つの展覧会について新聞雑誌での批評を基に論じており (シュッツェ: 2016)、後者は破壊行為に見舞われた展覧会の経緯を整理しているが (ルフェーヴル: 2016)、いずれも歴史的建造物と現代美術の関係性に着目してはいない<sup>(3)</sup>。そこで第一章では、ヴェルサイユ宮殿美術館が現代美術を取り入れるに至った経緯を確認し、第二章では批評、検閲、破壊行為に見舞われた四つの展覧会を考証し、その原因を突き止める。続く第三章では、前章の論述を踏まえて、歴史的建造物で現代美術が展示されることで生じる効果の一つを明らかにしたい。

## 1. ヴェルサイユ宮殿美術館と現代美術

パリから南西に約 20 キロメートルのところにあるヴェルサイユは、1624 年にルイ 13 世 (Louis XIII, 1601-1643) が狩猟の際の休憩地として別荘を建設したことから開拓されていった。17 世紀中葉には、ルイ 14 世 (Louis XIV, 1638-1715) がこの別荘を改築して居住地とし、建築家のルイ・ル・ヴォー (Louis Le Vau, 1612-1670) や造園家アンドレ・ル・ノートル (André Le Nôtre, 1613-1700) らにより豪華絢爛なバロック様式の宮殿が築かれた。なかでも、ルイ 14 世は自身の神格化も兼ねて、建物と庭園にギリシア神話のオリュポスの十二神の要素を取り入れた空間を創造した<sup>(4)</sup>。

フランス革命後、ルイ 18 世 (Louis XVIII, 1755-1824) はヴェルサイユ宮殿を美術館として維持することを決定し、これを受けたルイ＝フィリップ 1 世 (Louis-Philippe 1<sup>er</sup>, 1773-1850) は 1837 年に、フランスの戦争場面を描いた歴史画を展示することで国民としての意識醸成を目的とする「戦争の間」(Galerie des Batailles) を開設した。これが実質的なヴェルサイユ宮殿美術館の開館となった。

さて 1995 年になると、ヴェルサイユ宮殿美術館は国立美術館連合 (Réunion des Musées Nationaux) の直轄運営体制から文化施設公法人 (Établissement Public Culturel)

の管轄へと移管した。文化施設公法人は、中央政府に事前承諾を得ずに長期的なミッションや予算編成を組むことはもちろん、独自の企画を実施する自由が担保される<sup>(5)</sup>。だが法人化は同時に、文化施設公法人自らが収益を捻出する責任を付与した。

そして2003年、ヴェルサイユ宮殿美術館はSARS（重症急性呼吸器症候群）とイラク戦争の影響を受けて初めて赤字となり、来場者が50万人減少したのを理由に新しい資源の発掘と新規顧客を惹きつける必要性を公表した<sup>(6)</sup>。かくしてヴェルサイユ宮殿美術館は、新しい催し物の一つとして「ヴェルサイユ・オフ」(2004-2007)を企画した。

ヴェルサイユ・オフは、パリ白夜祭に関連した1日から2日限りの催し物である。ここでは、ストライプを表現の基調とするダニエル・ビュレン (Daniel Buren, 1928-)のほか、フェリチェ・ヴァリーニ (Felice Varini, 1952-) やマルク・クチュリエ (Marc Couturier, 1946-) らによる現代美術作品が宮殿や庭園へ展示された。とはいえ、この催し物は現代美術に特化したものではなく、現代音楽作曲家のアンドレア・セラ (Andrea Cera, 1969-) や料理人のアラン・デュカス (Alain Ducasse, 1956-)、そのほか調香師やデザイナーらも招聘される企画であった<sup>(7)</sup>。彼らの招聘は、ヴェルサイユ宮殿美術館が「新しい大衆を魅了し経営を立て直す目論見」<sup>(8)</sup>のために様々な分野を望んだからであり、集客のための一要素として現代美術が用いられたといえる。

ところが2008年になると、ヴェルサイユ・オフは現代美術に特化した展覧会「ヴェルサイユ宮殿の現代美術」(Art Contemporain au Château de Versailles、以下 ACCV) へと変貌する。ACCVは、一名以上の作家を招聘し、宮殿、庭園または離宮のトリアノン群を会場に、春または秋にかけて約3ヶ月間催される現代美術の展覧会である。これは、前年にヴェルサイユ宮殿美術館の総監へ就任したジャン＝ジャック・アヤゴン (Jean-Jacques Aillagon, 1946-) が、ポンピドゥセンター・パリの館長や文化・コミュニケーション省の大臣を歴任した、いわば現代美術に精通した人物だったために実現した。ACCVは2008年から新型コロナウイルス感染症が世界に蔓延する2019年まで開催され、展覧会には【表1】の作家たちが招聘された。

【表1】 「ヴェルサイユ宮殿の現代美術」展覧会の招聘作家（2008-2019）

年度	招聘作家	国籍
2008	ジェフ・クーンズ (Jeff Koons, 1955-)	アメリカ
2009	グザヴィエ・ヴェイヤン (Xavier Veilhan, 1963-)	フランス
2010	村上隆 (Takashi Murakami, 1962-)	日本
2011	ベルナール・ヴェネ (Bernar Venet, 1941-)	フランス
2012	ジョアナ・ヴァスコンセロス (Joana Vasconcelos, 1971-)	ポルトガル
2013	ジュゼッペ・ペノーネ (Giuseppe Penone, 1947-)	イタリア
2014	李禹煥 (Lee Ufan, 1936-)	韓国
2015	アニッシュ・ Kapoor (Anish Kapoor, 1954-)	イギリス
2016	オラファー・エリアソン (Olafur Eliasson, 1967-)	デンマーク
2017	グループ展覧会「冬の旅」(17名) <sup>(9)</sup>	8ヶ国
2018	杉本博司 (Hiroshi Sugimoto, 1948-)	日本
2019	グループ展覧会「見えるもの・見えないもの」(5名) <sup>(10)</sup>	4ヶ国
2020	新型コロナウイルス感染症の影響を受けて延期 (2021も同様)	—

表からわかるように、ACCVには世界各国の現代美術作家が招聘されてきたが、初年度はACCVの在り方についての疑問が噴出した。その一人として、フランス遺産基金の創始者は、「神聖で魔法のような場所であるヴェルサイユへの乱入に完全に衝撃を受けている。現代美術は、全体の美しさや完璧な調和のなかで破壊と散漫をもたらす。…中略…たとえ3ヶ月でも、ヴェルサイユ宮殿でのジェフ・クーンズは過ちである」<sup>(11)</sup>と、現代美術の闖入を非難した。そのほか、美術雑誌 *Connaissance des Arts* も「すべて（コレクション、設定、歴史、訪問者）が揃っているヴェルサイユに、本当に芸術的なレイヤーを加える必要はあるのか」<sup>(12)</sup>と、宮殿が現代美術の展示場所となることへ疑問を投げかけた。こうしたACCVへの違和感をあらわにした眼差しは、その後も様々な反応としてみられていく。

## 2. 批評と検閲と破壊行為

十年来のなかで、メディアにおいて批評が集中した展覧会とは、後述する四つに絞ることができる。フランスと外国の作家を交互に招聘した2011年までのACCVで<sup>(13)</sup>、多大な反応がみられたのは2008年のジェフ・クーンズと2010年の村上隆であった。クーンズ展覧会の初日には、小説家のアーノルド＝アロン・ウピンスキー（Arnaud-Aaron Upinsky, 1944-）が率いる「ヴェルサイユの防衛組織」の数十名が門前に集い、抗議運動を行った。彼は、ACCVを「マリー＝アントワネットへの侮辱である」<sup>(14)</sup>と叱責した。さらにルイ14世の子孫を自称するシャルル＝エマニュエル・ド・ブルボン＝パルム（Charles-Emmanuel de Bourbon-Parme, 1961-）は、ルイ14世を象徴するアポロンの間にクーンズ自身の胸像《セルフ・ポートレート》（1991）が展示されたことに憤怒し、作品撤去の嘆願書を国务院へ提出した<sup>(15)</sup>。村上の展覧会においても、ヴェルサイユを愛する人々からなる団体「愛しのヴェルサイユ」と、ウピンスキーとブルボン＝パルムが結成した団体「漫画に反対」が宮殿前にて抗議を行った。これら団体はまた、展覧会の中止を求めて署名運動を実施し、前者は3,500筆、後者は3,700筆を集めた<sup>(16)</sup>。

クーンズと村上に共通する反応には、抗議運動のほかに、彼らの経済活動と展覧会の関連を訝しむ指摘が挙げられる。クーンズの場合には、作品提供と寄稿をした実業家フランソワ・ピノー（François Pinault, 1936-）とアヤゴン総監が現代美術コレクターとアドバイザーの関係性にあることから、ACCVはピノーのコレクションの名声とその市場価値を向上させるだけだという批判が起きた<sup>(17)</sup>。村上についても、「リーマンショックで作品価格が下落した村上にとってヴェルサイユ宮殿での展示は、彼のビジネスが再開する希望を与える」<sup>(18)</sup>と、作品価値を高めることが展覧会の目的ではないかと疑念が向けられた。

この反応はまた、彼らの現代美術としての戦略が消費社会や経済と結びつきが強いゆえに生じた。クーンズは、大量生産される商品をあえて金属製の彫刻作品にすることで消費社会を揶揄するネオ・ジオメトリックの作家として知られるが、その一方で「販売することを楽しんでいる」<sup>(19)</sup>と語る。村上も著書『芸術起業論』（2006）のな

かで成功するための現代美術の経済的側面を滔々と語る。前出のフォスターも、クーンズと村上の特徴を「市場こそが両者のアートの媒体なのだ」と規定し、さらに「観光客のメッカ、ヴェルサイユ宮殿」での展示がそれを体現すると論ずる<sup>(20)</sup>。つまり、彼らの作品性と商売を好転させる構造が相俟って、両者へ数多くの反応が寄せられた。

2012年以降のACCVでは、ジョアナ・ヴァスコンセロスとアニッシュ・カプーアの展覧会が論争を巻き起こした。2012年のヴァスコンセロスの展覧会の論点は、生理用品で構成されたシャンデリアの作品《花嫁》(2001-2005)をカトリーヌ・ペガール総監(Cathérine Pégard, 1954-)が事前に展示不可としたことが作家本人へのインタビューで明るみとなり、検閲ではないかと取り沙汰された<sup>(21)</sup>。この措置についてペガール総監は、「作品選定は、我々と作家のあいだの対話の結果」<sup>(22)</sup>であると述べたものの、美術批評家のフィリップ・ダジャン(Philippe Dagen, 1959-)は「初めて女性作家を招聘するのに、女性らしさと関係のある作品を妨害するのは不思議だ」<sup>(23)</sup>と検閲の存在をほのめかした。実際、展覧会ではステンレス製の鍋と蓋を複数組み合わせさせた銀色のハイヒール《マリリン》(2011)や、有名なベビーシッターの名前がついた《メリー・ポピンズ》(2010)など、女性的な作品が複数展示されていた。最終的に、《花嫁》はパリ19区にある文化センター「サン・キャトル」(Cent Quatre =104)で公開された<sup>(24)</sup>。

そして2015年のカプーアの展覧会は、激しい論争と破壊行為を引き起こした。その契機は、作品《汚い隅》(2011-2015)にある。庭園に設置された《汚い隅》は、鉄製の大きい開口部のあるオブジェの周囲に、灰色と赤色の巨石を散らしたミクストメディアの作品である。2015年5月31日、新聞*Journal du Dimanche*はカプーアが本作品を「権力を握る女王の瞳」と言い表したと報道すると、開催前にもかかわらず、この発言をめぐる記事が散見された。記事には、《汚い隅》の来歴や作品の意図を解き明かそうとするもの<sup>(25)</sup>、ヴェルサイユ市長のカプーアに対する遺憾の旨を報じるものなどがあつた<sup>(26)</sup>。同年6月9日に展覧会が開幕すると、ついに破壊行為が発生した。先行研究によると、まず6月18日から19日の夜にかけて作品へ黄色い塗料が吹きつけられ、9月5日から6日の夜間には作家を冒瀆する言葉として「犠牲になった女王は二度侮辱された」や「行動主義のユダヤ人変質者によるフランス国民への二度

目の強姦」といった言葉がスプレーで巨石へ書かれた<sup>(27)</sup>。9月21日には言葉を金箔で覆い隠す作業が行われ、《汚い隅》は会期終了の11月1日まで警備員が駐在したうえで展示された<sup>(28)</sup>。二度目の破壊行為のあと、カプーアは「欧州で路上にいる何千人もの難民に同情する必要がある今、パリのヴェルサイユ宮殿の《汚い隅》に対する反ユダヤ主義的で人種差別的な攻撃は、我々のなかにある不寛容さと人種差別を全面に押し出している」<sup>(29)</sup>と、破壊行為と社会問題を重ねた声明を出した。

この事件の反響は凄まじく、カプーアの展覧会に関する記事はフランスを中心に3,374も執筆された<sup>(30)</sup>。これまでの展覧会に関する記事が3桁台であったことと比較しても、異例の多さである。なかでもフォンテーヌブロー城の総監は、「この襲撃は、歴史的建造物における現代美術という流行に終わりを告げるかもしれない」<sup>(31)</sup>と危惧を示した。その一方で、本件を寛容な態度で報じた記事もある。*Le Figaro*紙の記者ヴァレリー・デュポンシェル (Valérie Duponchelle, 生年不詳) らは、《汚い隅》とは近代美術史のなかで物議を醸すことで新しい価値を創造してきた作品、すなわちギュスターヴ・クールベ (Gustave Courbet, 1819-1877) が裸体女性の下半身を描いた《世界の起源》(1866) や、マルセル・デュシャン (Marcel Duchamp, 1887-1968) が男性便器へ署名をした《泉》(1917) と同等だと捉え、今回の騒動は「現代美術を新たな論争に回帰させる理想的な機会になる」<sup>(32)</sup>と、近現代美術史の系譜と結びつけて肯定的に論じた。

### 3. 歴史的建造物と現代美術の関係

《汚い隅》が多くの批評と破壊行為を招いた一方で、ACCVでは現代美術とヴェルサイユ宮殿が上手くリンクした事例もある。例えば、カプーアの《隅への射撃》(2008-2009) は、仮設の白壁の隅に向かって赤色の絵具の塊を大砲で打ち込むインスタレーションの作品で、1789年に第三身分が自らを国民議会に定めた球戯場に展示された。公式文書で「フランスの政治史にとって決定的な歴史的背景をもつこの場所は、《隅への射撃》によって再活性化された」<sup>(33)</sup>と説明された通り、本作品は「球

戯場の誓い」やその後起こったフランス革命で犠牲となった命を想起させる。

他方、ヴァスコネロスの展覧会では、金色や極彩色の布と糸を編み込んだ10メートル以上におよぶ三体の彫刻作品《王のワルキューレ》(2012)、《黄金色のワルキューレ》(2012)、《嫁入り衣装のワルキューレ》(2009)が戦争の間の天井へ吊るされた。ワルキューレとは、戦場にて生者と死者を決める女神である。これら作品を、496年から1809年までの戦争画と歴代の将軍や元帥の胸像と併置することは、フランスが国家として確立していく過程で流された数多の血への追悼という意味も持ちうる。プレス・リリースにおいても「ヴァスコネロスの荘厳なワルキューレは、35枚の大壁画のなかから、最も勇敢な戦死者を探しているようにみえる」<sup>(34)</sup>と紹介されており、作品と歴史的建造物が相互に響きあう展示となっていた。

上述のように、ACCVにおいて全ての作品と歴史的建造物の空間がこうした関係性を取り結ぶわけではない。ヘラクレスの間に展示されたクーンズの《バルーン・ドッグ・マゼンタ》(1994-2000)のように、現代美術と歴史的建造物の空間が上手くリンクしない場合もある。そうしたクーンズの展覧会には、「こんなに美しい場所にガラクタを置くのは残念だ」<sup>(35)</sup>や「滑稽に感じています……。えっと、なにしろ年代と様式が混ぜ合わさっているものだから」<sup>(36)</sup>という鑑賞者の反応がみられた。しかし、現代美術とヴェルサイユ宮殿の組み合わせは、ホワイト・キューブや、海辺や山間を活用した単なるサイト・スペシフィックの展示空間にはない効果を期待できるのではないか。

その一つとして、本稿ではヴェルサイユ宮殿の政治、歴史、文化的な要素を想起させる現代美術が展示される場合に限定して、鑑賞者の意識を歴史的建造物へと向けることができる位置づける。《隅への射撃》や「ワルキューレ」シリーズ作品は、まさに政治や歴史と結びついた作品といえよう。さらに2009年のグザヴィエ・ヴェイヤンの展覧会で宮殿の前庭に展示された《四輪馬車》(2009)も、「ヴェルサイユの宮廷で愛用されていた交通手段を思い起こさせる」<sup>(37)</sup>と紹介されたように、この場所が宮殿として使用されていた近世の文化を体現する作品となっている。こうした意味では、クーンズの《セルフ・ポートレート》やカプーアの《汚い隅》もまた、皮肉的ではあるものの、ルイ14世やマリー＝アントワネットを通じて鑑賞者の意識をヴェ



ルサイユ宮殿の歴史や文化へと繋げる現代美術作品であるといえる。

## おわりに

本稿は、ヴェルサイユ宮殿美術館の事例から、歴史的建造物で現代美術を展示すると何がもたらされるのかを探ってきた。これを通じて、ヴェルサイユ宮殿の政治、歴史、文化的な要素を想起させる現代美術が展示されるとき、鑑賞者の意識を歴史的建造物へ誘う役割を有することが明らかとなった。

最後に、歴史的建造物を活用した現代美術の展示は観光と結びついてきた。ヴェルサイユ宮殿美術館だけをみても前身のヴェルサイユ・オフは新規顧客の獲得が目的であり、2020年は新型コロナウイルス感染症拡大を受けて訪問者の80%を占める外国人旅行者が見込めないためにACCVは中止された<sup>(38)</sup>。とはいえ、先述した現代美術作品を歴史的建造物で展示するときに生じる「作品と場所の双方へと注意を向けさせる」役割は、二つの文化財を効果的にみせる意義において、この大禍が終息へ向かったとき、もっと言えば実際の展示空間がなくなる限り、重要な価値が見込めよう。ヴェルサイユ・オフから2010年までACCVを担当したキュレーターのローラン・ル・ボン (Laurent Le Bon, 1969-) は、この展覧会を「ホワイト・キューブへのアンチ・テーゼ」と称し、「現代的な芸術的創造は、この場所のいくつかのクリシェを打破するのに貢献」<sup>(39)</sup> すると提言した。本論文では、歴史的建造物で現代美術を展示する効果の一つしか解き明かせなかったが、ル・ボンの言説をしっかりと裏付け、そのほかの事例について論じるためには、今後の多角的な研究が望まれよう。

## 註

- (1) Brian O'Doherty, *Inside the White Cube*, University of California Press, London, 1976, p. 15.
- (2) Hal Foster, *The Art-Architecture Complex*, Verso, 2013 (Paperback edition), p. 148. [ハル・フォスター『アート建築複合態』(滝本雅志 訳) 鹿島出版社、2014年、220-221頁。]

(3) Irene Schütze, “Koons, Murakami und Vasconcelos in Versailles: Wertzuschreibung und Wertewandel durch Kontextualisierung,” *Marburger Jahrbuch für Kunstwissenschaft*, 43 Bd., Verlag des Kunstgeschichtlichen Seminars der Philippen-Universität Marburg, 2016, pp. 249-271. Thierry Lefebvre, “Pour Kapoor Exposition «Anish Kapoor Versailles» (9 juin- 1<sup>er</sup> novembre 2015),” *Société & Représentations*, No. 41, 2016, pp. 203-211.

(4) 例えば、グランド・アパルトマンの衛兵の間には戦争や軍神を象徴するマルスが装飾に用いられた。

Château de Versailles, “Le Grand Appartement du Roi: L'Appartement de parade, Le Salon de Mars,” <http://www.chateauversailles.fr/decouvrir/domaine/chateau/grand-appartement-roi#le-salon-dhercule> (accessed 2021-10-13).

(5) クサビエ・グレフ『フランスの文化政策——芸術作品の創造と文化的実践——』（垣内恵美子 訳）水曜社、2007年、187-188頁。

(6) Château de Versailles, Service de la communication, «*Montrer mieux, montrer plus*» *Rapport d'Activité: De L'Établissement Public du Musée et du domaine national de Versailles 2003*, Imprimerie Le Govic, France, 2004, p. 7.

(7) 全4回における招聘作家については、次の資料を参考されたい。Mairie de Paris, “Versailles Off,” *Nuit Blanche 2004 Vue D'Ensemble*, p. 6; Mairie de Paris, “Versailles Off,” *Nuit Blanche 1<sup>er</sup> Octobre 2005*, pp. 53-56.

Mairie de Paris, “Château de Versailles, Versailles off,” *Nuit Blanche 7 Octobre 2006*, p. 19; Mairie de Paris, “Ailleurs en France,” *6 Octobre Nuit Blanche 2007*, p. 59.

(8) Établissement public du musée et du domaine national de Versailles, Direction de l'information et de la communication, “Introduction par Christine Albanel,” *Rapport d'Activité 2004, De L'Établissement Public du Musée et du domaine national de Versailles*, Imprimerie Floch-London, France, 2005, p. 4.

(9) 17名の作家は次のウェブサイトを参照されたい。Château de Versailles Spectacles, “Voyage d' Hiver,” [https://www.chateauversailles-spectacles.fr/page/voyage-d-hiver\\_a224/1](https://www.chateauversailles-spectacles.fr/page/voyage-d-hiver_a224/1) (accessed 2021-10-13) .

(10) 5名の作家は次のウェブサイトを確認されたい。Château de Versailles Spectacles, “Versailles Visible / Invisible,” [https://www.chateauversailles-spectacles.fr/page/versailles-visible-invisible\\_a252/1](https://www.chateauversailles-spectacles.fr/page/versailles-visible-invisible_a252/1) (accessed 2021-10-13) .

(11) Valérie Duponchelle, “L'Analyse de Valérie Duponchelle; Quand l'art contemporain s'invite au château,” *Le Figaro*, 23 Juin 2008, p. 17.

- (12) Sylvie Blin, *Connaissance des arts*, “Jeff Koons, champion du gadget,” <https://www.connaissancedesarts.com/arts-expositions/jeff-koons-champion-du-gadget-1111384/> (accessed 2021-10-13) .
- (13) Jean-Jacques Aillagon, “Préface” in *Établissement public du château, du musée et du domaine national de Versailles, Jeff Koons Versailles*, X. Barral, Paris, 2008, p. 9.
- (14) Elaine Sciolino, “At the Court of the Sun King, Some All-American Art,” *The New York Times*, 10 September 2008, <https://www.nytimes.com/2008/09/11/arts/design/11koon.html> (accessed 2021-10-13) .
- (15) Versailles Controversé, “Versailles les Agitateurs, Charles-Emmanuel de Bourbon-Parme,” <https://controverses.sciences-po.fr/archive/versailles/index.php/agitateurs/bourbon-parme/index.html> (accessed 2021-10-13) . なお、嘆願書は国務院で棄却された。
- (16) Flore Galaud, “Murakami ne fait pas l’ unanimité à Versailles,” <https://www.lefigaro.fr/culture/2010/08/28/03004-20100828ARTFIG00372-murakami-ne-fait-pas-l-unanimite-a-versailles.php> (accessed 2021-10-13) .
- (17) Johannes Willms, “Koons in Versailles; Viel Lärm un ein Soufflé,” *Süddeutsche Zeitung*, 13 September 2008, <https://www.sueddeutsche.de/kultur/jeff-koons-in-versailles-viel-laerm-un-ein-souffle-1.687540> (accessed 2021-10-13) .
- (18) Bernard Hasquenoph, *Louvre pour tous*, “Un Murakami vu à Versailles en vente chez Christie's,” <http://www.louvreourtous.fr/Un-simili-Murakami-Versailles-en,604.html> (accessed 2021-10-13) .
- (19) Anthony Harden-Guest, *Vanity Fair*, “Art or Commerce? November 1991,” <https://www.vanityfair.com/news/1991/11/art-or-commerce> (accessed 2021-10-13) .
- (20) ハル・フォスター 「2007c アートと市場」 (荒木慎也 訳) ハル・フォスター、ロザリンド・E・クラウス、イブ＝アラン・ボワ、ベンジャミン・E・D・ブークロー、デイヴィッド・ジョーズリット 『Art Since 190: 図鑑 1900 年以降の芸術』 (尾崎信一郎、金井直、小西信之、近藤学編) 所収、東京書籍株式会社、2019 年、800-803 頁。
- (21) Agence France Presse, “Vasconcelos à Versailles: une réflexion sur la place des femmes (Filipetti),” *Agence France Presse*, 18 juin 2012.
- (22) Agence France Presse, “L'artiste Joana Vasconcelos pose un hélicoptère à plumes à Versailles,” *Agence France Presse*, 15 juin 2012.
- (23) Philippe Dagen, “Art Contemporain; Joana Vasconcelos, une femme un peu trop libre pour la cour du Roi-Soleil,” *Le Monde*, 21 juin 2012, p. 29.

- (24) Valérie Duponchelle, *Le Figaro Culture* “*The Bride de Joana Vasconcelos au Centquatre*,” <https://www.lefigaro.fr/arts-expositions/2012/06/27/03015-20120627ARTFIG00573--the-bride-de-joana-vasconcelos-au-centquatre.php> (accessed 2021-10-13) .
- (25) Jackie Wullschlager, “Palace revolutionary: Anish Kapoor at Versailles,” *The Financial Times*, 5 June 2015, <https://www.ft.com/content/70fbcc24-09d5-11e5-b6bd-00144feabdc0> (accessed 2021-10-13) .
- (26) Angelique Chrisafis, “Anish Kapoor's Versailles ‘Vagina’ causes controversy in France; Artist behind Paris's biggest cultural event of the year has described Dirty Corner as ‘the vagina of the queen’ talking power,” *The Gaudian*, 4 June 2015, <https://www.theguardian.com/artanddesign/2015/jun/04/anish-kapoor-versailles-vagina-controversy-france> (accessed 2021-10-13) .
- (27) Thierry Lefebvre, “Pour Kapoor Exposition «Anish Kapoor Versailles» (9 juin- 1<sup>er</sup> novembre 2015) ,” *Société & Représentations*, No. 41, 2016, pp. 203-204.
- (28) *Ibid.*, pp. 205-206.
- (29) Anish Kapoor, “Dirty Corner, 06.09.2015,” <http://anishkapoor.com/1046/dirty-corner-06-09-2015> (accessed 2021-10-13) .
- (30) Établissement public du château, du musée et du domaine national de Versailles, Direction de l'information et de la communication et Mission stratégie et contrôle de gestion, *Rapport Annuel d'Activité 2015, Établissement Public du Château, du musée et du domaine national de Versailles*, Imprimerie Vincent, 2016, p. 112.
- (31) Bommelaer Claire et Valérie Duponchelle, “Le Château de Versailles sous la pression du scandale; Art Contemporain, La dégradation de l'œuvre d'Anish Kapoor conduit le domaine à renforcer sa sécurité,” *Le Figaro*, 8 Septembre 2015, p. 29.
- (32) Valérie Duponchelle, Marie Périer, “Versailles: le «Vagin de la Reine» d’ Anish Kapoor crée la polémique,” *Le Figaro*, 4 Juin 2015, <https://www.lefigaro.fr/culture/2015/06/04/03004-20150604ARTFIG00152-versailles-le-vagin-de-la-reine-d-anish-kapoor-cree-la-polemique.php> (accessed 2020-10-13) .
- (33) Château de Versailles, “Anish Kapoor, Artiste britannique, confronte ses sculptures aux jardins de Versailles,” *Établissement Public du Château, du musée et du domaine national de Versailles*, 2015, p. 10.
- (34) Château de Versailles Spectacles - Service Presse, *Joana Vasconcelos Versailles*, OPUS 64, 2012, p. 20.

- (35) Christine Spolar, “Sniffing at pop culture exhibit, The Tribune’s Christine Spolar finds many in France don’t exactly appreciate American Jeff Koons’ Versailles exhibit,” *Chicago Tribune*, 23 September 2008, p. 2.
- (36) Ina.fr, “Polémique Exposition Jeff Koons,” <https://www.ina.fr/video/PA00001418319/polemique-exposition-jeff-koons-video.html> (accessed 2021-10-13) .
- (37) Château de Versailles, *Veilhan Versailles*, Château de Versailles Bureau des Activités Éducatives, 2009, p. 1.
- (38) Jérôme Béglié 03/06/2020, Le Point. fr, “Catherine Pégard: « Le modèle économique de Versailles a été anéanti »,” [https://www.lepoint.fr/histoire/catherine-pegard-le-modele-economique-de-versailles-a-ete-aneanti-03-06-2020-2378205\\_1615.php](https://www.lepoint.fr/histoire/catherine-pegard-le-modele-economique-de-versailles-a-ete-aneanti-03-06-2020-2378205_1615.php) (accessed 2021-10-13) .
- (39) Laurent Le Bon, “A Fresh view of Versailles, Xavier Veilhan” in Château de Versailles, Jean-Pierre Criqui, *Xavier Veilhan 1999-2009*, JRP | Ringer, Zurich, 2009, pp. 125-126.